

古代ギリシャのピグミーの伝説と現実に存在する「ピグミー」

～19世紀後半を中心として～

北 西 功 一

The legends of the Pygmies in ancient Greece and the actual “Pygmies”
in the second half of 19th century

KITANISHI Koichi

(Received September 26, 2014)

はじめに

古代ギリシャの人たちはピュグマイオイ（のちにピグミーと呼ばれる）というコビトについて明確なイメージを持っていた。それは詩人や哲学者、歴史家の記述、さらに遺跡から発掘される壺に描かれたコビトの絵において表現されている。ピグミーという言葉は中世には怪物（モンスター）と同列に扱われるコビトを意味するようになった。近代に入り、啓蒙主義的な考え方がヨーロッパの知識人に広まると、ピグミーは伝説の中の架空の存在とみなされるようになる。フランスの博物学者ビュフォンは「鳥の博物誌」の中で、古代ギリシャのツルと戦うピグミーの話において、ピグミーとされたのはサルであり、群れを成すサルが集団で鳥と戦っているようすが人間と似ていたためにコビトと見間違えたと解釈している（北西, 2011）。

1860～70年代において中部アフリカで体の小さな人たちが発見され、彼らはピグミーと呼ばれるようになった。これは姿かたちが似ているということが理由ではない。古代ギリシャのピグミーとアフリカに実在する人たちが同一視されたためである。古代ギリシャの話は、伝説から、部分的ではあるかもしれないが、真実を含んだ話とみなされるようになった。

古代ギリシャ人がアフリカの体の小さな人たちについて情報を持っていたという時に引き合いに出される話は、主に3つである。ホメロスのイリアスのピュグマイオイ、ヘロドトスのナサモン人の探検の話に出てくる体の小さな黒人たち、アリストテレスの動物部分論のピュグマイオイである。本稿のテーマは、19世紀後半以後の探検家やピグミー研究者がこれらの話をどのように解釈しているのかということである。私には、たとえ中部アフリカで体の小さな人たちが見つかったとしても、古代ギリシャの話を彼らと結びつける必然性はなく、作り話のままにしておいてもよかったと思える。人が興味を引くような架空の話を加えたがる探検家が古代ギリシャの話を持ち出すのならともかく（例えば Du Chaillu (北西, 2012: 55-57)), 当時を代表する人類学者が真剣に古代ギリシャの話に出てくる人をアフリカ大陸に何とか位置づけようとしている。その代表者が Quatrefages である。彼の主張は、当初は他の研究者の一部が受け入れているが、後に無視されるようになる。その変遷をたどり、理由を考えてみたい。

1. ピグミーもしくは体の小さな人が出てくる古代ギリシャの3つの話

(1) ホメロスの「イリアス」

ここではまずピグミー研究者がよく取り上げる古代ギリシャの3つの話を紹介する。最初にピグミーという名称の語源となったピュグマイオイという単語が使われている文献として最も古いホメロスの叙事詩イリアスを紹介する。

さて、両軍は、それぞれの大将の指揮の下に戦列を整え終えると、トロイエ勢は群がる鳥のごとく、喧しく叫びわめきつつ進む—その有様は、冬の嵐と激しい雨を逃れた鶴の群れが、コピト族（ピュグマイオイ）に死の運命をもたらしつつ、啼き声も高らかにオケアノスの流れをめざして飛び、朝のまだきに仮借なき戦いを仕掛けていく、その鶴の叫びが大空の下に響きわたるさまにも似ていた。他方、アカイヤ勢は戦意を漲らせ、互いに助け合いながら戦わんと心中に帰しつつ肅々として進む（ホメロス, 1992: 87）。

これはトロイア戦争において、トロイエ（トロイア）軍とアカイヤ軍が戦場に向かうシーンを描いている。ピュグマイオイは、肘尺（ピュグメ：肘から手首もしくは指の付け根までの長さ）が語源で、そのくらいの身長の人を指している。この詩には、ピュグマイオイがツルと戦って負ける人たちで、その場所はツルが渡っていった先という情報しかない。

(2) ヘロドトスの「歴史」におけるナサモン人の探検の話

ヘロドトス（紀元前485-425年）の「歴史」にはピュグマイオイという単語が出てくる部分があるが、それについては北西（2011: 41）を参照していただき、ここではピグミー研究者に最も重視される話と言ってもよいナサモン人の探検の話を紹介する（「歴史」巻二32）。

私はしかし、あるキュレネ人たちから次のような話を聞いた。その話によれば、彼らはアンモンの神託所へ詣でアンモンの王エテアルコスと面談したことがあったが、いろいろと話すうちに話題はナイルに及び、その水源を知る者がいないという話になると、エテアルコスが以前自分を訪ねてきたナサモン人のことを物語ってくれたという。ナサモン人というのはリビア系で、シュルティスからその東方の小地域にわたって居住している民族である。さて、訪ねてきたナサモン人たちにエテアルコスが、リビア砂漠について何か自分たちの知らぬことを知っているかと訊ねたところ、彼らはこんな話をしたという。彼らの国の有力者の子弟で乱暴者の一団がおり、成人するに及んでいろいろと途方もないことを考え出したのであったが、中でも仲間の内から五人を抽籤できめ、リビアの砂漠地帯を探検し、これまで最も奥まで見てきた者たちすら見なかったようなことを探れるかどうか試みようということになった。リビアの北方海岸の一帯は、エジプトから始まりリビアの末端であるソロエイス岬に至るまでの全域にわたり—ただし、ギリシア人とフェニキア人の占拠する地方は別であるが—リビア人およびリビア系の多数の民族が住んでいるのである。しかし、海と海岸地方一帯に広がる住民の部落より先になると、リビアは野獣の群がる地帯に入る。そして野獣地帯より更に先は砂地で、極度に水が乏しく、何一つない荒涼たる砂漠である。

さて仲間たちから送り出された若者らは、水と食料を十分に用意し、まず人の住む地域を通り過ぎて野獣の生息地帯に達し、これを越えて砂漠を西風に向かって進んだ。幾日もかかって広大な砂漠地帯を抜けると、平地に樹木が生えているのが目に入った。駆け寄って樹上に生っている果実をと

ろうと手をふれたとき、人並より背の低い小人の団が襲ってきて彼らを捕らえて連れ去ったという。ナサモン人は小人たちの言語が判らず、彼らを連行する小人たちはナサモン人の言葉を解さぬのである。小人たちは広大な沼沢地帯を通ってナサモン人を連行し、沼地を通り抜けるとある部落にいたが、この部落に住む者たちはいずれもナサモン人を連行した一行と同じ背丈で色が黒かったという。この部落の傍らに大河があり、西から東へ向かって流れていたが、その河中には鱶の姿が見えたというのである。……

例の部落の傍らを流れていた河がナイルであることは、エテアルコスも推察したところであったが、事実それで辻褄が合うのである。ナイルはリビアに発し、リビアを真二つに切っているのだからである（ヘロドトス, 1971: 180-182）。

これは、肌の色が黒く人並よりも背の低い人たち、つまり身長が数十センチしかないコピトのような存在ではなく、現実に十分ありえる人たちに出会ったという話になっている。ヘロドトスは、ピュグマイオイという単語をこの中で使っておらず、ナサモン人が出会った人たちとピュグマイオイを同一視していないと考えられる。場所は、砂漠を越えて木が生えている平地と、湿地帯である。そこにはエテアルコスがナイル川と推測した川が西から東へと流れている。

(3) アリストテレスの動物部分論

アリストテレスは動物部分論の中のツルについての記述でピュグマイオイの話を出している。

現にツルはスキュティアの平野から上部エジプトの沼沢地（ナイル川の水源）まで移動するのである。（ここではピュグマイオイ〔小人族〕を攻撃するといわれている。つまり、この話は神話伝説ではなく、実際にそんな小人族—ヒトばかりでなくウマも—がいて穴居生活をしているということである。）（「動物部分論」第8巻12章597a、アリストテレス, 1969: 24）。

アリストテレスはホメロスと同様にツルと戦う体の小さな人としてピュグマイオイを取りあげている。ツルが渡っていく先がピュグマイオイが存在する場所であり、そこを上部エジプトのナイルの水源として、「この話は神話伝説ではない」とわざわざ断っているのは、当時のギリシャ人が神話伝説と考えるようになっていたが、それを否定しようとしているためと思われ、後にこの話を解釈する人には、アリストテレスがこう断言するからには彼がピュグマイオイの存在について何か確実な証拠を握っていたのではないかと想像する人も多い。

2. ヨーロッパ人によるピグミーの（再？）発見とギリシャの話

ピグミーを発見したとヨーロッパで認められた最初の人 Schveinfurth である。彼はナイル川をさかのぼり、ナイル川の分水嶺を越えてウエレ（Uele）川に到達し、その付近を治める Munza 王の宮殿で Akka と出会った（北西, 2012: 59-61）。彼は1874年に出版された探検記の中で、上記の3つの話を記載している。アリストテレスの話の後に続く文章を紹介しよう。

この引用した文章は学識のある Stagyrite（筆者注：アリストテレスのこと）が何らかの正確で肯定的な情報を持っているということの意味しているようで、そうでなければ彼は自身の主張の正しさをそれほど強く主張することはなかっただろう。しかし、アリストテレスが彼の記憶の中で揺れ動いていたイリアスの一節とツルが冬にアフリカに向かうということを知っていたためだけによって、

ツルとピグミーをアリストテレスと一緒に述べたと、私たちが推測することもできるかもしれない。…現在のトピックについて私たちに関心があるのは、キリスト教の時代の3、4世紀前にギリシャ人がナイル川の水源地帯に住んでいる成長を妨げられたことが特徴的な人たちを知っていたことである。文字通りの身長ではないにしろ、このような事実からすると、私たちにアリストテレスの意味において中部アフリカのコビトの人種に対してピグミーの名称を使用してもよいのかもしれない (Schweinfurth, 1874: 125-126)。

Schweinfurth は、最初はアリストテレスが本当に中部アフリカの体の小さな人たちの情報を持っていたかどうかについて確信が持てないと書いているが、最後のところではキリスト教の時代の3、4世紀前に、つまりこれはアリストテレスが生きていた時代を指すが、ギリシャ人がその人たちを知っていたと断言している。そして、その事実から彼は自身が発見した人をピグミーと呼んでもよいのではないかと述べている。古代ギリシャのピグミーと中部アフリカに住む体の小さな人たちの明確な同一視はここから始まっている。これが可能だったのは、彼が Akka を発見したところがナイル川の水源の近くだったことによるのだろう。

とはいえ、Schweinfurth の Akka の発見以後、アリストテレスのピグミーと彼らを同一視することがすんなりと受け入れられたわけではない。現在のガボンで調査し、体の小さな人の存在を報告したドイツの探検隊のメンバーである Lenz は、1878年に探検記を出版している。彼はその中でアリストテレスとヘロドトスの話を取りあげている。彼は、ヘロドトスの話は神話的な修飾がなくアフリカ内陸部の小さな人種について伝えていると評価しており、一方でこれまで作り話とされていたものの中にも真実が部分的に含まれているが、話を付け加えたり、誇張することによって見えにくくされていると述べている (Lenz, 1878: 103-105)。明記はされていないが、話が付け加わったり誇張されているというのはアリストテレスの話だろう。ツルと戦って敗れる身長数十 cm のコビトは、現実にはガボンに存在した人とは明らかに異なる。彼はすでに Schweinfurth の本の内容をよく知っており、引用もしている。とはいえ、Lenz は自身が出会った Abongo と呼ばれる体の小さな人たちをピグミーと呼んではいない。これには、アリストテレスによって想定されたピグミーの居住地がナイル川の水源であり、ガボンとナイルの水源地では地理的な距離が遠いということも一因だろうが、そもそもアリストテレスの話を用意していないということがあるのだろう。ヘロドトスのナサモン人の話は Lenz もかなり信用しているが、ヘロドトスはその中でピグマイオイという単語を使っていない。

ヘロドトスの話に信憑性の高さを感じている探検家は他にもいた。南スーダンで Akka と出会った Chaille-Long がオスマン・トルコのエジプト総督に Akka の女性を献上したときに、「ヘロドトスによって漠然と述べられていたけれども、実際に存在することに対する疑問が現在はなくなった人種の中から文明の世界へ提示される最初の成人として興味を引くだろう (Chaille-Long, 1876: 301).」と述べている。また、ドイツの人類学者 Hartmann も1879年に出版された本の中で、ホメロス、ヘシオドス、プリニウス、アリストテレスのピグミーは神話上の存在であるのに対して、ヘロドトスの人並より背が低い人たちは現実的であると考えている (Hartmann, 1879: 62-64)。

3. フランスの人類学者 Quatrefages による古代のピグミーと現実のピグミーの同一視

フランスの人類学者 Quatrefages は、1881年から1882年にかけて発表された論文 *Les Pygmées d'Homère, D'Aristote, de Pline, d'après les découvertes modernes* (現代の発見に基づい

たホメロス、ヘロドトス、アリストテレス、プリニウスのピグミー) と、その論文に加筆して出版された本 *Les Pygmées* において、古代のピグミーと現実のピグミーについて議論している。この本の序文では古代のピグミーが現実に存在したことを示すことがこの本の主要な目的であると述べている (Quatrefages, 1887: vi)。ここでは彼の本、特に第1章「近代科学に基づいた古代の人たちのピグミー」を中心に上げる。

最初に、彼はホメロスとアリストテレスの上記の話を取りあげ、そのピグミーを Schweinfurth が発見したピグミーと同一視しようとしている。まず、ホメロスの文章にはツルとピグミーが戦った場所が記されていないが、ツルが毎年ヨーロッパからアフリカへ移動すること知っていたはずで、また冬の厳しさから逃れるために海を渡って移動した後に敵と出会っているため、ホメロスがこの場所をアフリカと想定していたことは間違いないという¹⁾。

アリストテレスの話については、彼は上記の訳とは微妙に異なる訳を用いて説明している。それは以下のようである。「ツルはスキュティアの平野からナイルの水源地あたりにある上部エジプトの沼沢地に移動する。これはピグミーが住んでいる土地で、彼らの存在は作り話ではない。人々が言うように、小さな身長の人たちが実際に住んでいて、そこでは馬もまた小さい。彼らは洞窟で生活している (*ibid.* : 3)。」これに基づき、Quatrefages は、アリストテレスがはっきりしない形ではあるが、ピグミーの誇張された身長の低さを訂正しているという。つまり、ホメロスの詩に出てくるツルに虐殺されるほど小さな人間と、ここに出てくる小さな身長の人たちの間には違いがあると説明している (*ibid.* : 3-4)。

アリストテレスは、ナイル川の水源地が上エジプトの湿地帯に位置すると考えており、そこがピグミーの居住地であるとしていた。これについては、湿地は上エジプトではなくさらに上流の南スーダンに存在しており (スッド湿地)、さらに最近までその湿地までしかナイル川をさかのぼることができず、アリストテレスもしくは古代ギリシャ人がそこをナイル川の水源地と考えたことは当時の知識からすると仕方がないことであると述べている。本当の水源地はもっと上流にあることが現在では分かっているが、方向は間違っていないともいう (*ibid.* : 4-5)。

小さな馬については、Baker というイギリス人旅行者の報告で、Bari (Gondokoro という南スーダンの北緯4°54'、東経31°40'にある町付近に住む民族) の動物はとてもサイズが小さく、牛と雌羊はコビトの国のサイズであったという話があることから、エジプトがこの地域を支配していた時代にウマもこの地に到達して、他の家畜動物と同じように退化を被ったのかもしれないと推測している (*ibid.* : 5-6)。

彼はこれらの解釈のもと、アリストテレスは非常に正確であり、彼の言ったことの一部は正しく、残りの部分も筋は通っていると結論付けている (*ibid.* : 6)。彼はアジアのピグミーの伝説もネグリトと結びつけて解釈しようとしているが (*ibid.* : 6-16)、その部分は省略する。

ヘロドトスのナサモン人の話であるが、彼は西から東に流れる大河ということで、ニジェール川がその川であると考えている。そのころようやくニジェール川の流がヨーロッパ人に知られるようになり、実際にニジェール川はマリのトンブクトゥあたりからブルーレムあたりまで東に流れている (*ibid.* : 19-21)。住民が黒人であるということについては、19世紀にはトゥアレグやベルベル、フラニによってこの地方の支配が争われているが、彼らは比較的最近ここにやってきた人たちで、10世紀には黒人は北緯20度あたりまで広がっていたという説を唱える研究者がおり、ヘロドトスの時代ならさらに黒人がこのあたりに進出していた可能性が高いという (*ibid.* : 22-23)。

次に Quatrefages はピグミーの分布域とこの川の場所について検討している。Quatrefages は、

当時報告されていた西のピグミーの最も北の分布地として、ガンビア川中流域の Tenda Maié をあげている。これは1818年にそこを訪れた Mollien の報告によるもので、それは「これらの黒人の外見上の一般的な特徴に画一性はほとんどない。しかし、Faran の村の住民は彼らの身長の高さと四肢の弱々しさ、彼らの声の穏やかさが目立っている。これは本当にアフリカのピグミーである。」というものである (Mollien, 1822: 216)。

Tenda Maié とナサモン人が囚われたと Quatrefages が想定しているニジェール川の地域は緯度はほぼ同じであるが経度でおよそ8度離れており、かなり遠いが、ガンビア川とニジェール川両者の上流域はそれほど離れておらず、ナサモン人を捕らえた人と Tenda Maié のピグミーがかつては同じ人種であったと認めることは容易であるという (Quatrefages, 1887: 248)。

また、Quatrefages は、ニジェール川の地域には現在ピグミーは発見されておらず、また西のピグミーの中心地はガボンあたりで、そこから Tenda Maié やニジェール川の地域までかなりの距離があり、そこもピグミーの空白地帯であることを問題として取り上げている。彼はその理由として、以前は中部アフリカからニジェール川や Tenda Maié の地域まで連続的にピグミーが分布していたが、この地域はずっと侵略の舞台であり、内陸部から海岸部に向かって継続的に征服者が存在し、比較的弱い人種がかなりの地域において必然的に消えてしまったと解釈している (*ibid.*: 248)。これは先住民であるピグミーが後からやってきたより大きくて強力な隣人に追いやられ、滅ぼされてきたという探検家や研究者のほとんどが持っていた考えと一致している (北西, 2012; 2013)。

現在からみると、Mollien の報告だけからピグミーがそこに存在すると信じることは不可能で、実際、そこにピグミーは存在していない。西アフリカの広大な地域にもともとピグミーが存在したと考えるには、各地で何らかの痕跡がいくつも残されているのならともかく、ナサモン人の話と Mollien の報告だけでは証拠として少なすぎるように思える。とはいえ、この Quatrefages の解釈はその後研究者の間に広まっていくことになり、ヘロドトスのナサモン人の話は事実を表していると考えられるようになるのである。

4. Quatrefages の仮説以降の19世紀の研究者

イギリスの人類学者である Flower は大英博物館の自然誌部門の部長で、アジアとアフリカの体の小さな人たちを研究している。彼は1888年4月13日にイギリス王立協会で The Pygmy races of men というタイトルで講演を行い、その内容が Nature 誌に掲載されている。彼はその中でアリストテレスやヘロドトスの話、およびそれをビュフォンがサルと解釈したことを述べた後、Quatrefages の本を取りあげている。

しかし、地球上の人々の実際の状態に関するより最近に得られた情報は、この主題についての考えの見直しを促し、古代の文献に関するより注意深いそしてより批評的な研究を生み出した。特に、パリの自然誌博物館の傑出した経験豊富な人類学の教授である Quatrefages は、注意深く問いに関係するすべての証拠を検証して分析し、古代の著者がナイル川源流域のアフリカ内陸部とアジアの最も南という二つの場所にピグミーを位置付けたことと彼らが描いたピグミーの特性から、これらの地域に現在でも住んでいる小さな人たちの存在に関して彼らが実際に情報を持っていたことを証明するために、巧みに議論を展開している。Quatrefages を確信させ、そして、そのような伝説や神話の背後にある真実を発見し文学と歴史の父の正確さを回復させるという仕事に喜びを感じる人を十分に満足させる証拠は、昨年、現代科学シリーズにおいて「ピグミー」という題で出版された

小さな本の中に読みやすいかたちで集められている。この講演の主題についてのより詳細な情報を知りたい人はこの本を参照していただきたい (Flower, 1888: 44)。

Flower はこのように Quatrefages の解釈を信頼し、この論文の中でも Quatrefages の本の内容を何度も引用している。とはいえ、Flower はヘロドトスの話を無条件に信じているわけではないようだ。彼はこの論文の終わり近くで、「もし、ヘロドトスのナサモン人の説明が史実に基づくものなら、西から東に流れている川はニジェール川に違いなく、2300年前には現在よりも北の方に広がってコビトたちは住んでいたことになる (ibid. : 69、傍点は筆者)。」Flower は科学者としてより慎重な立場をとっているようである。

有名な探検家 Stanley は、その著書 In Darkest Africa において、「26世紀前、彼 (筆者注：中部アフリカの森で Stanley が出会った体の小さな人) の祖先は5人の若いナサモン人の探検家を捕虜にし、ニジェール川のほとりの村で彼らとはしゃいだ。」と記載し (Stanley, 1890: 41)、引用文献はついていないものの Quatrefages の解釈を採用していることは明らかである。

ドイツ人の探検家の Lenz と Stuhlmann の論文と本について簡単に紹介する。上述の Lenz はその後1894年に「いわゆるアフリカのコビト民族について」という論文を発表している。また、Stuhlmann は Emin Pasha とともに探検し、ピグミーと出会い、詳細な探検記を1894年に出版している (その内容は北西, 2013: 63-65を参照)。彼らもヘロドトスやアリストテレスの話を書いているが、Quatrefages のニジェール川の説は認めていない。両者とも、アリストテレスがピグミーの居住地としたナイル川の水源の沼沢地をナイル川上流にある湖 (これはアルバート湖やビクトリア湖を指すと考えられる) であるとし、またナサモン人が連れて行かれた場所もその湖の付近であり、大きな川はエテアルコスやヘロドトスが推測したようにナイル川であると考えている。両者ともヘロドトスとアリストテレスの話は真実を含んでいて、古代ギリシャ人はナイル川上流域とそこに暮らす人たちについて何らかの知識を持っていたと述べている (Stuhlmann, 1894: 436; Lenz, 1894: 404, 407)。

5. 古代エジプトのピグミーと古代ギリシャのピグミー

1892年に発表された Schiaparelli の著作で、古代エジプトの第6王朝の時代にエジプトにピグミーが連れてこられたという話がヒエログリフの碑文に残されていることが紹介された。この研究がどのように進んだか、そしてそのエジプトのピグミーがピグミー研究者にどのように考えられたかについては、北西 (2014a; 2014b) を参照していただきたいが、これによりピグミー研究者の多くは、実際に古代エジプトにピグミーがやってきたと考えるようになった。このことがピグミー研究者の古代ギリシャの話に対する考えに与えた影響を紹介する。紙幅の関係上、代表的な二人のピグミー研究者 Schebesta と Turnbull についてとりあげたい。

ドイツ人宣教師・民族学者 Schebesta のピグミーについての著作は、それまでの探検記のようなものとは異なり、最初のピグミーの学術的な民族誌と言える。彼が1940年に出版した本「ピグミー」では、古代エジプトの話の前に古代ギリシャの話がある。

ギリシャ語のピグミーという単語はコビトもしくはグノームの意味を持っているが、私たちにそれを伝えたギリシャの著者はこの小さなアフリカ人の特異なイメージとその単語をつなげた。ホメロスは、はっきりとナイル川とその支流とわかるアフリカの川岸に暮らしているコビトの部族をほのめかした。トロイアの城門での戦闘の叫び声によって、彼はピグミーに襲いかかるツルの泣き叫

ぶ飛翔を思い起こした。・・・

より後に、アリストテレスは、ギリシャの科学が「父」の川、別の言い方をすればナイルの水源まで進み、そこがピグミーの中心地であるということの証人となった。歴史の父ヘロドトスはアフリカの内陸部への若いナサモン人の探検を報告していて、より具体的である。不運なことに、それはピグミーの国の場所を明示していない。注釈者は、ナサモン人の旅の表現について、いろんな仮説を表明し続けてきた。冒険気分の5人の若者が、エジプトを出発し、リビアの砂漠を越えて奥深く入っていくことを計画した。・・・

他のギリシャとローマの著者も、ついでに暗黒大陸のピグミーに言及している。彼らの話は、それらを伝説の領域へと締め出さないといけなような信じがたいものである。古代のとても古い時代からギリシャで流布していたそのような伝説はエジプトに起源を持っている (Schebesta, 1940: 13-14)。

Schebesta は、古代ギリシャに伝わるコビトの話は古代エジプトに起源を持つものであり、そして、古代エジプトのピグミーの話が真実であると Schebesta は考えているので、古代ギリシャの話も中部アフリカの森に住むピグミーに部分的には基づいていることになるという。アリストテレスについては古代エジプトからの情報に加えて、実際のナイル川の水源についての知識に基づいているとしている。ヘロドトスの話についても具体的な話として現実を反映していると考えている。

Schebesta はアリストテレスとヘロドトスのピグミーの所在地をナイル川源流域近くとし、ニジェール川流域という解釈を採用していない。これはアフリカ内陸部の探検が進み、ピグミーが中部アフリカの熱帯雨林地域にしか存在しないことが確定してきたことや、古代エジプトとピグミーがつながることでピグミーとナイル川もつなげて考えられたことによるのだろう。これは次の Turnbull でも同じである。

アメリカの人類学者 Turnbull はピグミー研究者として世界で最も知られている人だろう。彼の著作は一般大衆にも広く読まれ、彼のピグミー像は大きな影響力を持っている。ここでは最も読まれている1961年に出版した *The Forest People* を取りあげる。古代エジプトの話 (北西, 2014b: 77-76) のあとで、古代ギリシャの話が出てくる。

ホメロスがツルとの闘いにおいてピグミーに言及するとき、彼はエジプト起源の情報に頼っていたのだろう。しかし、神話の要素はすでに入り込んでいて、イリアス (第三歌) において、彼はトロイアとギリシャの間の闘いの記述でピグミーに触れている。(続いてイリアスの話: 省略)

アリストテレスの時代までに、西洋の世界ではピグミーを伝説として扱う傾向がさらにはつきりと強まった。なぜなら、アリストテレス自身が、彼らの存在は一部の人たちが信じているような作り話ではなく、真実であり、ナイル川の水源に彼らは住んでいると、断定的に述べているからである。

作り話であると信じようと信じまいと、モザイク製作者は事実どのようにピグミーが暮らしているか、例えば、彼らが森に作る小屋の種類さえもまさに知っていたということをポンペイのモザイクは示している。しかし、それから今世紀に入るまで、100年もたたない前まで、私たちのピグミーの知識は減少し、彼らが神話的な生き物や半人 (semi-human) であるとか、木のでっぺんを飛び、尻尾でぶら下がり、自身を見えなくする力を持っていると考えられていた (Turnbull, 1961: 20-21)。

Turnbull も古代ギリシャの神話を古代エジプトのピグミーからの情報に基づいているとし、それに時代とともにいろんな話が付け加わったり、変形したりし、徐々に作り話のようになっていったという。とはいえ、ポンペイのモザイクの話のようにそこには本当の情報も含まれていると考えている。

考察

中部アフリカにおいて体の小さな人の存在が確認されるということは当時のヨーロッパの多くの研究者にとって意外なことだった。当初は疑う人も存在したが、実際に何人かがヨーロッパに連れてこられると、疑う人はなくなっていった（北西, 2012）。ただし、Schweinfurth による古代ギリシャのピグミーと彼の発見した体の小さな人を同一視は、彼の直感的な主張に過ぎず、論理的な説明はなされていない。

一方、Quatrefages は、アフリカ各地からの報告を網羅的に収集し、それと古代ギリシャの話とを矛盾しないように何とか結び付けようとした。彼には古代ギリシャの話が何らかの真実を含んでいるという強い信念があったことが伺える。ただし、この信念は、ナサモン人が連れていかれた具体的な場所が異なったりすることはあるものの、Quatrefages だけでなく、当時の研究者や探検家の多くに見られ、多分、この話を知るヨーロッパの多くの人にもこれを壮大な歴史ロマンと感じていたに違いない。まだ情報が不十分な状況では、Mollien の報告などあいまいなものを自身の考えに都合の良いように解釈する余地が大きかった。また、架空の存在とされたものが実在するとなった時の反動として、何でも認めてしまうという傾向がこの時期にはあったように思われる。本稿では触れていないが、エチオピア南部のオモ川下流域のピグミーの存在は多くの研究者が信じており（北西, 2012: 54-55）、疑わしい報告を否定的にとらえるのではなく、可能性がかなりあるとみなしていた。

Quatrefages のニジェール川という推定は、アフリカ内陸部の探検が進みピグミーの分布が確定されていく中で否定されることになるが、Schebesta や Turnbull も古代ギリシャの話が一部現実に基づいていると考えている。これは古代エジプトの人たちがピグミーについて情報を持っていたということが新たな傍証として加わったことが大きい。20世紀中頃においても解釈は変わりつつも古代ギリシャの話と中部アフリカに実在するピグミーは結びつけられている。

壮大な歴史ロマンとは何だろうか。一つは、古代ギリシャ（とエジプト）が直接的もしくは間接的にピグミーの情報を得て、中世においてそれが失われかけ、現在になってそれが再び確認されたということが、偉大な古代・暗黒の中世・ルネサンスという流れに一致していることにあるだろう。二つ目はヨーロッパを文明世界（古代ギリシャ文明と近代ヨーロッパ文明）とし、その対極として原始的で未開なピグミーという位置づけが古代ギリシャの時代から不変であることがあげられる。また、少し視点が異なるが、古代ギリシャ（もしくはエジプト）の時代からピグミーは中部アフリカの森の中で変化せずに暮らしてきたという点でピグミーは不変であり、だからこそ原始的で未開であるとされるのだが、一方でヨーロッパは進歩・発展し続けているという対照的な歴史を経験しているということもあるだろう。

現代のピグミー研究者で古代ギリシャの話を持ち出す人はほとんどいない。一方で古代エジプトの話は事実に基づいていると考えている人が多い。古代エジプトの話を実際と考えるのなら、上記の Schebesta や Turnbull のように、古代エジプトの話が変形されて古代ギリシャに伝わったと考えることも可能なはずである。ヨーロッパ（もしくは欧米）のピグミー研究者の少なくとも一部は心の中ではそのように考えているのだが、古代エジプトの話と異なり、あま

りにも話が變形されて空想的な記述になっているため、専門的な本や学術論文には不適切な内容と考えているのかもしれない。Turnbullの本などを讀んだ一般の読者は、古代エジプト・古代ギリシャとピグミーのつながりを素直に受け入れている可能性もある。

このような壮大な歴史ロマンとしてのピグミーという見方が、現実のピグミーに対するヨーロッパ人による見方、ひいては彼らとヨーロッパ人との関係に影響を与えてきた、もしくは、与えていくのかもしれない。非ヨーロッパ人としてその点に関心を持ってみたい。

注

1：このツルはクロヅルを指すと考えられるが、現在の生物学的な知見では、この鳥はアフリカ大陸ではスーダン、エチオピア、エリトリアに渡り、中部アフリカ熱帯雨林からは遠い(Cramp, 1980: 618-620)。中部アフリカ付近に渡る鳥で似たものはシュバコウ（ヨーロッパのコウノトリ）で、ケニアとウガンダから南アフリカまで移動する。ただし、シュバコウの生息地はサバンナやステップなどある程度開けた土地であり、熱帯雨林ではない（Cramp, 1977: 328-331）。シュバコウでもピグミーと実際に接触する可能性は高くないだろう。

参考文献

- アリストテレス, 1969『アリストテレス全集8 動物誌(下)・動物部分論』(島崎三郎 訳) 岩波書店。
- Chaillé-Long, C. 1876. *Central Africa: Naked Truths of Naked People: An Account of Expedition to the Lake Victoria Nyanza and the Makraka Niam-Niam, West of the Bahr-el-Abiad (White Nile)*. Sampson Low, Marston, Searle, & Rivington, London.
- Cramp, S. (ed.) 1977. *Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Vol. I, Ostrich to Ducks*. Oxford University Press, Oxford.
- Cramp, S. (ed.) 1980. *Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Vol. II, Hawks to Bustards*. Oxford University Press, Oxford.
- Flower, W. H. 1888. The Pygmy races of men. *Nature* 38: 44-46, 66-69.
- Hartmann, R. 1879. *Die Völker Afrikas*. F. A. Brockhaus, Leipzig.
- ヘロドトス, 1971『歴史(上)』(松平千秋 訳) 岩波書店。
- ホメロス, 1992『イリアス(上)』(松平千秋 訳) 岩波書店。
- 北西功一, 2011「ピグミーという言葉の歴史：古代ギリシアから近世ヨーロッパまで」『山口大学教育学部研究論叢』60(1): 39-56。
- 北西功一, 2012「ピグミーとヨーロッパ人の出会い-1860~1870年代を中心に-」『山口大学教育学部研究論叢』61(1): 51-74。
- 北西功一, 2014a「Herkhufのコピトとピグミー~エジプト学における研究の概要~」『山口大学教育学部研究論叢』63(1): 83-94。
- 北西功一, 2014b「古代エジプトとピグミーの関係~ピグミー研究者の視点を中心として~」『山口大学教育学部研究論叢』63(1): 69-82。
- Schebesta, P. 1940. *Les Pygmées*. Gallimard (Translated by F. Berge).
- Schweinfurth, G. 1874. *The Heart of Africa: Three Years' Travels and Adventures in the Unexplored Regions of Central Africa from 1868 to 1871*. Vol. 2. Sampson Low, London.
- Lenz, O. 1878. *Skizzen aus Westafrika*. A. Gofmann & Co., Berlin.

- Lenz, O. 1894. Über die sogenannten Zwergvölker Afrikas. *Schriften des Vereins zur Verbreitung naturwissenschaftlicher Kenntnisse in Wien*. 34: 401–438.
- Mollien, G. 1822. *Voyage l'Intérieur de l'Afrique aux Sources du Sénégal et de la Gambie*. Tome II, Arthus Bertrand, Paris.
- Quatrefages, A. 1881–82. Les Pygmées d'Homère, D'Aristote, de Pline, d'après les découvertes modernes. *Journal des Savants*. 1881: 94-107, 1882: 345-363, 457–478, 694–712.
- Quatrefages, A. 1887. *Les Pygmées*. Librairie J.-B. Baillière et Fils, Paris.
- Stanley, Henry M. 1890. *In Darkest Africa: or, the Quest, Rescue, and Retreat of Emin, Governor of Equatoria*. Vol. 2. Charles Scribner's Sons, New York.
- Stuhlmann, F. 1894. *Mit Emin Pascha ins Herz von Afrika*. Dietrich Reimer, Berlin.
- Turnbull, C. M. 1961. *The Forest People*. Simon and Schuster, New York.